

少年兵からの 葉書

「前略 私事入団の際に御多忙に
もかわらず御見送り下さいまして
誠に有難う御座居ました。其後私も
元気でやっております。(以下略)」
昭和二〇年二月、当時十六歳だっ
た美若祥祐少年は、海軍の新兵や下
士官の教育・養成機関である大竹海
兵団に入隊しました。冒頭の手紙は、
入隊の際に父に送った挨拶状で
す。

美若祥祐は昭和三年八月、美
若辰太郎の三男として羽出村に
生まれました。高等小学校卒業後、
神戸三菱造船青年学校に入學、
そして溶接工に従事していた昭
和十九年に海軍を志願し、翌年
二月の入隊へとつながったのです。



昭和20年2月の葉書

戦局が悪化していた当時、兵力の
不足を補うために兵役法が改正され、
昭和十八年(一九四三)、これまで
満二〇歳だった徴兵年齢は満十九歳
に引き下げられ、翌十九年一〇月に
は満十七歳以上と、さらに満十七歳
未満の志願も可とされました。祥祐
が志願したのはこの法改正の直後と
思われます。二人の兄も東南アジア
や中国方面へ出征していることから、
幼少期より軍人への憧れもあったの
かもしれません。十六歳での入隊
志願は、計り知れない決意があった
ことでしょう。
葉書には「面会謝絶」と大きな赤



昭和20年5～6月頃の手紙

いスタンプが押されており、戦争末
期の予断を許されない緊迫した状況
が想像できます。

二通目は、昭和二〇年の五～六月
頃に父へ宛てた葉書です。わずかな
訓練期間を経て、一等兵へ昇格し、
「責任の重大さを感じると共に、嬉
しく思えて居ります」「腕に初め
のいきりです。片腕が重い様に思
えます」と、一人前の兵隊として認
められた嬉しさと重圧が混在した心
境が少年らしく述べられ、文末に「身
に気を付けて増進に邁進して下さい。
ではさようなら。」と銃後の護りを
担う家族への気遣いで締められてい
ます。

祥祐少年はこの頃、駆逐艦「桜」
の乗員となります。「桜」は、五月二
十六日に呉海軍工廠で修理が行われ、
六月十四日に呉を出港していますの
で、その時に乗員となったのでしょ
うか。

「桜」は米軍機から投下される機
雷の監視任務のため、大阪湾に配備
されましたが、七月十一日、航行中
に触雷し弾薬庫の爆発によって沈没、
乗員一三〇名が犠牲になりました。そ
の一人に、入隊後まだ半年にも満た
ない美若祥祐一等兵も含まれていま
した。「ではさようなら」で結ばれた二
通目の葉書が、文字通り彼の遺書と
なりました。

祥祐の墓石には、父の詠んだ短歌

が刻まれています。



美若祥祐の墓 右は父の短歌

大君の 赤子であると 出る時に
桜は花と 蕾ちりけり

花が咲く前の蕾が、花のように
散ってしまったという表現に、未来
があつたはずの若い息子が、戦争の
犠牲にならざるをえなかったことへ
の父の無念さがにじみ出ています。

八月には六十九回目の終戦記念日
を迎えます。戦争を知る者も少なく
なりつつありますが、わずか七〇年
前にはこうした若者達までも、国を
守るために身命を捧げたこと、そし
て戦後の豊かな生活は、当時の人々
の多大な犠牲の下で成り立っている
ことを忘れてはなりません。

美若祥祐の葉書は、現在奥津歴史
資料館にて展示中です。

参考資料：美若祥祐軍事郵便、墓碑、
『岡山県戦没者忠魂録』、『わが海戦記』
協力：美若忠生氏

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733